

卒業論文の要旨

論文題目	政治が博物館の展示内容に介入する危険性 ——2015年のピースおおさかの展示リニューアルを例にして——
氏名	藤原魅優
メジャー	歴史学
(要旨) 本論文は、日本の博物館で行われている戦争展示について、2015年に行われたピースおおさか（大阪国際平和センター）の展示リニューアルを事例に、戦争展示の意義とその特徴、人々の戦争認識と政治の動きに着目し論じたものである。日本における戦争の歴史は、被害国としての視点と加害国としての視点から見ることができる。特にピースおおさかは、加害国の視点から展示を行う数少ない博物館であったにもかかわらず、戦争認識をめぐる激しい対立と政治的な圧力によって、展示変更を余儀なくされた。そこで、ピースおおさかの展示リニューアルに至った経緯とその影響について検証し考察した。 まず、博物館で行われている戦争展示の意義と特徴について、リアルな戦争体験を伝え、平和と戦争の悲惨さに焦点を当てた展示が多い現状を指摘した。このことから、被害の側面を強く意識した展示と、加害と被害の歴史を扱う展示を行う代表的な博物館を挙げ、それぞれの共通点と相違点を明らかにした。 次に、ピースおおさかでの加害展示が撤去される経緯を深掘りするために、日本の動きとして、戦争責任をめぐる議論と「歴史修正主義」について考察した。このような動きが大阪府政および大阪市政にどのように関わるようになったのかについて、橋下徹が行った文化政策に着目した上で、ピースおおさかのリニューアルにどのようにつながったのかを検証した。 最後に、政治介入が周囲にもたらしたことと、今後起こり得る影響について考察した。リニューアル後のピースおおさかの姿勢や、歴史学会や府民・市民たちの抗議の一例について挙げ、展示リニューアルをきっかけに歴史修正主義勢力への対抗がより顕著になったことを明らかにした。 以上の検討により、歴史修正主義の思想を持つ政治家による展示介入がいかに危険であるかということが判明した。ピースおおさかの展示リニューアルの経緯からは、文化政策と政治（家）との関係性がどうあるべきか、また、正しい歴史認識を持つことがいかに重要であるか、という課題が改めて浮き彫りとなった。	
(指導教員の推薦のコメント) 本研究は、ピースおおさかにおける展示改変の事例を通して、博物館の戦争展示における政治の介入の問題に鋭く切り込んだ意欲作である。戦争展示の意義、歴史修正主義の動きとその危険性、展示改変後のピースおおさかの状況など、多角的な視点から分析している。特に、橋下徹の歴史観とそれに基づく権力の強引な行使、「新しい歴史教科書をつくる会」との関係にまで踏み込んで考察したことは特筆すべき成果である。ますます右傾化が進む現在において、歴史修正主義とどのように対峙すべきか、また政治と文化の関係をどのように構築すべきかといった、現代社会における重要な課題を提起する研究である。	